小學修身書

初等科之部

卷二

T1A1
22
(MO24)

小學修身書卷之三

第一章

我が身は父母の遺體なれば假り初めふもおろそかにすべからず。身を保つべし。常に居所正しく事おこなひ居るときも容貌をおごそかにして不埒なる身持ちすべからず。日新館童子訓

獨りを慎むこいふてあり。獨りとい人
ゑゝぬ所ゐり。ゑそかゝる我ゑこゝり知る
こ思ふより。心のゐごゝり外ゐも顯きて
輕きいうゑ名を流し。重きい身を損ひ
侍るいと淺ま。我がい心ゐ我ゑこゝり知
りたるこきい。萬人ゐ見分けらるいと
恥づゐ。こ思ひて慎み恐るべきこゝゐ
り。女小學

かの小人の。君子乃德ゐ及び至らぬ處
い。何こゐれば。他人のかゐらば知らぞ
して。己獨り知る處乃。一念の動く處ぞ。
よく君子い慎み。小人いえ慎まぬゐよ
りて。君子の德ゐ及ぶぬゐり。そき唯人
の見ざる所の。一念の善惡を。君子をよ
く慎みたまふなり。これ小人の君子ゐ
及ばぬ處ゐり。大和中庸

第二章

人と生まれて。學ばざれば。生まれざるに同じ。學びても。道をきゝざきば。學ばざるや同じ。道を知りても。行いざれば。知らざるふ同じ。大和俗訓

其故いかんとふれば。人と生まれて學ばざれば。人の道を知らずして。人と生まれたる甲斐ふし。是人と生まれて學ばざれば。生まれざるに同じきなり。學ぶい道を知らんがためなり。學ばざれば。知らずんば學ばざるこ同じきなり。又道を知るい行ちんがためなり。學びて道を知りても。行いざれば。知らざるふ同じ。同上

學問い。先づ志しを立つるを以て本とを。道を知り行ひて。君子ふ至らんこ思

ふ心常ふ怠りふく念々やまざる様志し様立つるこいふ志し立たざれば學ぶを成就せざ故ふ古人も志しある者い其事終ふ成るこいひ又志し立つい。學の半ふりこいへり。同上

志しを立つるい學問の本ふり志しを立つるい勇猛ふるべし柔弱ふして怠るべこのらば怠れば志るしふくして。

はかゆこのぞ道を求むるふ切ふる志しいたとへば飢ゑて食を求め渇きて湯水を求むるが如くふるべし僅ふ悠々こして怠れば志しをたる只此道ふ心を一をぢふをべし外物ふ奪いるべのらば同上

書を讀まば我が身ふ受用をるをを專一ふ志すべし受用こい書ふ記せる教

へを我が身ふ受け用ひて守り行ひ用ま立つるをいふ。もし書を讀み義理を聞きても身ふ受け用ひずして行いざれば何の益もふきいたぢら事ふり。同上

志しを立つるをい。大ふして高くそべし。小まして卑々れば。小成ま安んじて成就しがたし。天下第一等の人こふらんと平生志そべし。世俗と同じく賤し

く卑くそべこのらば斯く志しを立てゝ日々月々ふ勤め行いゞ久しくして其功積もりて必ず人ふはさるべし。同上

學問の道い極めて廣大高妙まして深奥ふり然れども其近き所い孝悌忠信の日用常行ふ在り。故ま以のふる愚ふる者も此道は學びやすく知りやそく行ひやすし。高遠ふして。ものやしく異ふ

る道よを非ず。同上

學ぶ人い。只我が知のくらく。我が德の進まざるとを憂ふべし。我よ學問才知技藝ありとも。我を知ありとし。我が才ふ誇る心あるべからず。人各こ知あり。又長ぞる處あり。人をおろかふし侮るべからぞ。諫めを妬せぎ。我を是とせべこのらぞ。己が不善をとて。人の善よ隨ひ人の善を用ひて。我が身よ行ふべし。我を知ありとそるものい。惡德ありいましむべし。同上

讀書學問そるい。本をはとむるなり。藝術を學ぶい。末ふ達そるなりたとへば草木のもとから立ちて。枝葉ちげるが如し。本を本とし。末を末として。本末の ね備いるべし。文武訓

藝ふ〻れば。人事ふたうさし。一生乃間事かくるを多し。わこの時勤め知る[illegible]し。凡そをしめ不勤むきば。後ふ樂しみ多し。是このき時學ばざれば。老いて悔ゆきごも益ふし。同上

第三章

梓弓たる立ちしより年のくれ行くまで射るゞ如くまおもゆれば。時日の早く過ぎゆくい止めあへずむべもこしと名づけ。又ときとゆへるふらんを れば光陰箭の如く。時節流るゝが如しといへるも浮けるを不非ず。樂訓

今の昔まこのゞ。後の今まかざるを知りてか祈てより悔いふらんを思ひ。時日を惜しこ。一日もいたづら不過ぐすべこのらゞ。ふ暮れて明日も

ありこてたのむべこのらばそふの日の内を日々ふ惜しむべし。同上

人生此日の再び得がこきを知りて時々其事を勤めて怠らず日々此生を樂しこて憂へぞよく勤めよく樂しむ人い一日を以て一月こし一年を以て十年とし十年を以て百年こす勤めこ樂しこを知らざる人いたとひ百歳の長壽を保つこも常ふ怠りて一生の間何の爲し出だせる善事ふし是勤めざれば有り。大和俗訓

女い常ま心ぞのひしして其身をこつこつ謹み守るべし朝い早く起き夜い遲く いねる家の内の事ふい心を用ひおりぬひうみはむぎ怠るべこのらば。女大學

第四章

人の身は天地父母の恵みをうけて生まれ又養はれたる我が身なれば我が私の物はあらぬ天地のたまもの父母の殘せる身なれば慎しみてよく養ひて毀ひやぶらぬ天年を長く保つべし是天地父母に孝の本なり

養生訓

人身を至て貴くおもくして天下四海

ふものへがたき物ふ非ずや然るふ是を養ふ術を知らぬ慾を恣ふして身を亡ぼし命を失ふて愚ふる至りふり身命と私慾この輕重如よく慮りて日々ふ一日を慎て私慾乃危きを恐るゝを深き淵ふのぞむが如く薄き氷りを踏むが如くふらぬ命長くして終ふ殃なかるべし豈樂しまざるべくんや命短

けきバ。天下四海の富を得ても益ふ
し。なのられ山を前ふ法をても用ふし。
然れば道ま従ひ。身を保ちて長命なる
ふど。大ふる福ふし。同上
人の氣い。常まのびて強きがよし。身ふ
惡事なくして。をぢおそれふそれバ氣
常ふ乃ぢて。強くふる。秘事記
養生の術い。勤むべきをよく勤めて。

身を動かし。氣をめぐらすを善しこそ。
勤むべきを怠勤めずして。臥すを好
み。身を息め怠りて。動かさるい。甚だ
養生ま害あり。養生訓
食後まを。必ず數百歩行して。氣をめ
ぐらし。食を消すべし。眠り臥をべこのら
ば。同上
飲食乃養ひい。人生日用專一の補ひふ

て半日もこのき難し。然きごも飲食い人の大慾ふして口腹乃好む所ふり其好めるふはこのせほしいまゝふそれば節ま過ぎて諸病を生ず命を失ふ。同上

人生日々ふ飲食せざるとふし常ま注つしみて欲をまゝへざれば過ぎやそくして病ひを生ぞ古人禍を口より出で病ひい口より入るといへり口の出し入ま慎むべし。同上

病ひある人養生の道をば固く慎みて病ひをば憂へ苦しむ癒このらば憂へ苦しめば氣ふさがりて病ひ加る病ひおもくてもよく養ひして久しくれば思ひしより病ひいえやそし。同上

保養の道い。みづこのら病ひを慎むのみならば又醫をよくえらぶべし天下ふ

もつへがくさき父母の身我が身を以て。庸醫の手ふゆゞぬるいあやうし　同上

第五章

人の目は百里の遠き找見まゞも其背を見ず。明鏡といへども其うらを照らさゞ。是を以て人知ありといへども我が身のあやまりを知りがたし。故に君子は學ぶ。專ら我が身をこゝろみ人の諫めを聞き用ひ過ちをあらりて改むるをむねとす。大和俗訓

過ちを恥ぢて僞りかざるべからず是心を欺き人を欺くなり。もゝ不我が過ちあらんをもべきやうなし。何やまらば。直ぐるいひなをいはもべし。隱して僞りかざるべからず。何やはりて又人を欺くいあやまりを重ぬるなり。いよく

罪焰このくふる。同上

常ふ我ゞ身をかへりみて。先づ我ゞ過ちを知るべし。そでふ過ちを知りふそ。速かふ改むべし。孔子も。過てバ則ち改むるふ。そでこのるとふかれこのゝまへり。我ゞ身の過ちを知らざるハ。愚なり。過ちを知りて改めざるハ。則ち惡なり。知らずして過つより。猶不其罪ふこの。

同上

凡べて平日おそれ慎ゝしゝ事の過ちなきやうふすべし。萬の災禍を慎ゝしゝを薄地より起ふるふり。言葉ハ信ゝのりて。偽りふく。誠あるを本ゝとすべし。日新館童子訓

第六章

同じく人と生まれて。富貴ふる人ゝのり。

貧賤なる人あり。其高下の品。誠に多し。富貴なる人は。怠らぬにして。人を惠むを樂しとすべし。樂訓

富貴の人。善を好めば。富貴の力よりて。人を救ひ善を行ふて廣し。是誠に樂しみ多かるべし。貧賤なる人。もし艱難よりてよく身を慎みて過ち改め。善を勤め行なば。禍なくして樂しき多うるべし。大和俗訓

富貴の人は。古より世ざまに多くれど。心安くして。憂苦なく。身閑に暇ありて。常に樂しむ人は。世に稀なれば。是を以て清福の樂しみ。富貴にまさること遥この上越えたるを知るべし。樂訓

極めて貧しき人も。我が分の身きに安んじて。憂ふべからぬ。生まれ付かざる

富貴を羨むべからぬ。同上

貧窮ふして其憂へたへがたしとこれへ
ども能く貧をたらへて習ひ熟すれば。
苦しきをふし凡その事なるゝことあれざ
るふ因りて苦樂あり。家道訓

患難ありとも和樂を失ふべからず。も
し身い沈む時世うつろひぬとも心を
自ら寛くすべし。土御門院の御歌ふう

き世ふいかゝれとてこゝに生まれけめ。
はこゝろ知らぬ我が涙の那又古歌ふ。
うたをい世をふるゝ不どの習ひぞと思
ひもさゝで何ゝげくらんとよめるゞ
如し。樂訓

第七章

朝い早くおき門戸を早く開かせ家内
の塵を拂ひ門の内外庭中を掃除して。

皆いさぎよくもべし。家道訓

居室も庭中も常ふ掃除していさだよくすべし。斯くの如くすきべ氣を養ひ心をいさぎよくも暗くあがらはしけきべ心氣の養ひこころふらば。同上

以かゝ不ぞ塵ふきこても賤げふせ屋のいゝ如せを所ハむさく見ゆるものぞおしバ節々水を澆ぎ塵を拂ひて清むるを。

富家よりもおごそかなるべし。婦人養草

衣服ハ儉素ようかざり少くよの常ふして賤しかゝざるゞよし。又貧しき人もはゞ免て潔くあかづき穢きざる様用ふ爲し。大和俗訓

貧しきもづの女ハ錦繡綾羅を身ふふるゝとはそい及びがゝくこも。せめてハ髪を梳りて人ふむさく思はしをま

むづきせゝきぬやうふこ手ふ適ふ油まふ身だしふみをるを古今同意ふるべし。婦人養草

第八章

衣服飲食い。二つはなくてからぬ我ゞ身をそゞつるものふて。一日もふくてかなハざるものふれごも若し義ふたゞひ禮ふそむきて是を用ふれバかへりて我ゞ身を害をるゆゑふる。聖人其法を立て給へり。大和小學

をける物ふ逢ひ。餓ゑたる時ふあらゝ。味ひすぐきて珍美ふる食ふ逢ひ其品多く前ふはらふるとも善きなごのかぎりの外い堅くはらゝしをて其節ふ過ぐすべからゝ。養生訓

衣服い常ふ用ひて。以つもよき製法染

め色、ゝり。時の好みよりたがひて世のあしき俗ふうつるべからず。大和俗訓

女の衣裳うるいしこのらんを我願へる人。人の目を驚かしまどいためんを求むるよこしまなる心より起りて。浅ましなる心根あり。身よいたゞ里ぶるものを掛け侍るとも心を錦ふかし侍らんこそ女の本意なるらめ。内訓

孟子ゟ説けるハ道を樂しゝ義理を味ひて。我が志しをやしなふハ大なる所をやしなふ道理あり。我が口腹のゝを快くせんと願ひ美食を好む人ハ小なる所をやしなひて大なる所を失ふゆゑ。ふかゆうの人を心ゝける人ハ。のぞかり賤しをおりふべしとぞ。大和小學

人々身ゟ用ふる所の衣服飲食などハ

よきを好みて吾が身と心といよからんことを願はずおろかなる至りなるべし。同上

小學修身書卷之三

明治十六年五月十一日出板板權所有屬
文部省編輯局藏板

定價金六錢宣堂